

第四矢 底なる魚（承前）

6

夏の日輪が傾き始めた。日が沈めば、今宵も鶴ノ森に（怨）おんが蠢うごめき始めるだろう。

「先生、お加減はいかがですか？」

由良がすぐ隣に端坐し、心配そうに自分を見ていた。

十五夜まで、あと五日。

広賢が自邸しやくしの廂まノ間で思案ふけに耽り始めてから、かれこれ二刻か。

由良は手持ちぶさが嫌いらしく、いつも何かをしていた。

書物の整理、祭具の浄化から屋敷の清掃まで多岐にわたるが、その仕事の中には、他の家人たちが由良に任せ切っている、気まぐれな主の世話も含まれていた。そろそろ嫁入りを考えてやるべきだが、広賢の養女にしたところで良縁もなさそうだし、由良がいなくなると広賢は恐ろしく不便だから、思案を先送りしてきた。

「指先に痺しびれが残っているが、だるさはなくなった」

あれから三日も経つのに、体はいまだに怨に反応していた。相当強い邪気だ。

「わたしは、まだ眉間がヒリヒリします」

人により靈気を強く感じる部位は違う。指先か眉間、あるいは丹田が多い。

ひと月前、広賢は由良を伴って夜の鶴ノ森へ行った。近頃は頻繁に黒い霧が立つ、と聞いたか

らだ。

一刻ほど待ち、湧いてきた黒霧の中でサムハラの術を試したところ、周囲一間の霧がきれいに晴れた。驚きの結果だったが、邪気を体に取り込むせいで全身が冷たくなり、だんだん痺れてきた。屋敷に戻ってからは、不調で数日寝込んだ。復調すると、広賢はまた鶴ノ森へ出向き、術を施した。

由良の心配をよそに、広賢は内心で狂喜していた。目に見えるほどに具現した漆黒の強力な邪気こそが、サムハラの力の源泉たる〈怨〉だ。広賢はこれまで、蠅一匹殺せぬ陰陽道の無力を自嘲してきた。だが、違う。陰陽術、とりわけサムハラこそは怨に対し、そして怨により、大いに力を発揮する術なのだ。広賢は怨を頭でしか知らなかったために、秘術の入口で門前払いを食らってきたわけだ。

三日前の夜は施術の最中、ついに吐血した。血の色は紫がかった。

「由良、神宝かんだからの浄化は済んだのか？」

太陽の光をたっぷり浴びた白水晶しろずいしょうの群晶の上に置いて清めても、強い邪気を取り去るには、優に二日を要した。

「はい。今朝はかすかに邪気が残っていましたが、母石のおかげですっかり大丈夫です」

由良が広げた青い袱紗ふくさの上に、兄晴仁が残した一对の宝玉が置かれている。

道返玉ちかえしのたまと足玉たるたまは本来、丁ノ字の先に靈石が三つ嵌め込まれた古代の祭具である。道返玉は金

細工くじやくいしに孔雀石、足玉は銀細工に黒水晶という取り合わせだ。晴仁が特に作らせた代物らしく、素材が選り抜かれており、見栄えも美しい。

広賢は道返玉を手に取り、革紐で首に掛けた。

「いま少しで、サムハラを謎を解き明かせそうな気がするのだがな」

「鶴退治はその後にできないのですか？」

昨夜も、家成邸で頼政たちと談合をしたが、勝機は乏しいと広賢は見ている。

帝のご不調は巷の噂になっていた。家成としても、これ以上の延期はできない。

「大人には事情があるのだ」

「わたしはもう子供じゃありません」

由良がふてくされたように頬を膨らませる。

広賢が指先で軽く突つくと、風船がはじけた。由良が笑う。

「釣殿つりどのの掃除を頼む」

「かしこまりました」と由良が頭を下げ、広賢の前を辞した。

(黒雲を祓うことは可能だ。だが、それだけで勝てるのか……)

検非違使庁で無惨な骸を見せられた日から、広賢は鶴について調べ、思案してきた。

まづもって説明すべき謎は、鶴そのものよりも、黒雲だ。

広賢は法勝寺の八角九重塔の高みから、平安京を幾夜も眺めた。

毎月十五夜、鶴ノ森から湧き立つ黒雲は、黒き虹を作って禁裏まで到達し、やがて消えてゆく。

虹や雲にならずとも、鶴ノ森では今や三日にあけず黒霧が発生していた。清新な森自体が邪気を生むわけではないのに、なぜあれほど大量の邪気が集中するのか……。

サムハラが闇の陰陽道とされ、禁じられてきた最大の理由は、それが〈怨〉を操る術の体系だ

からだ。広賢は現在伝わるサムハラじゆかたの呪と形をすべて覚えてはいるが、体の不調と戦いながら試し始めたばかりで、体得してはいない。

(はたして今の術が、どこまで通用するか……)

広賢は袱紗の上で輝く足玉を取り、首から掛けた。

庭から吹く微風でも、指先がひりついた。敏感になっているらしい。

由良が釣殿の薙戸しとみどを開け放ち、風を通して、釣殿の邪気は消えない。晴仁がサムハラしとみどの術で怨を扱っていたせいだろう。

釣殿は失踪の日、兄が出かけた時のままにしてあった。いつ戻ってきてでも使えるように、月に一度は掃除をさせ、清めさせてきた。頼政に掻き回されて激怒したのは、兄の思い出を穢されたように感じたからだ。

(兄上なら、いかに鶴と戦われる?)

首から掛けた対の神宝へ、指先をやる。

サムハラとくさのかんだからの術で用いる〈十種神宝〉中の二つで、晴仁を思い出す縁よすがでもあった。

かつて藤原道長は、高齢となった安倍晴明に対し、死後も自分に仕えるよう求めた。謹んで命を受けた晴明は、死者復活の秘法に必要な十の神宝を集め、あるいは自ら作った。だが、寿命が足りず、死の床に呼んだ嫡男吉平よしひらに対し、サムハラを邪道として禁じ、探究の成果を書き記した巻物まきもの〈三跋羅〉と十種神宝の破却を命じた。

ところが遺言は守られず、門外不出の秘宝として安倍家に伝えられてきたのである。

(兄上、力を貸してください)

胸元の一対の宝玉を、そつと握り締める。

広賢は〈三跋羅〉全巻を誦そらんじ、兄が残した日記を頼りに、この神宝を用いて様々な施術を試みてきた。それは陸上の水練に等しかったが、広賢はひとつの仮説を持つに至った。

そもそもサムハラは、怨の力を用いた死者復活の秘法である。死せる魂を冥界から呼び戻す際、大きな障壁は二つあった。一つは魂を入れる肉体の喪失であり、いま一つは冥界と現世の往来の困難だ。

新たな肉体として生み出された失敗作こそが異形であり、今回は鶴だ。怨の力で創られた生き物に対し、サムハラの術が有効なのは当然ともいえる。

晴仁は昔、こう言っていた。

冥界は現世と表裏を成す。ただし、背中合わせであるため、ふだんは見えぬし、触れえない。

だが、冥界はすぐそばに、どこにでもあるのだ、と。

最も手頃な往来の方法は、験力げんりきのある鏡だ。鏡を使って冥界とやり取りできる陰陽師は稀に出るし、鏡がしばしば神社のご神体とされるのも、冥界に繋がっているからだ。あいにく十種神宝のうち、対を成す二枚の鏡の所在は不明だが、もしやあの黒雲は現世と冥界の狭間にあるのではないか……。

さらに思案を重ねるうち、由良が葺戸しどみどを閉める音がし、われに返った。

釣殿の清掃を終えたらしい。

兄からは「決して入るべからず」と戒められていた部屋だ。隠す意図よりも、弟にはまだ危ないと考えていたからに違いない。

広賢は立ち上がり、中門廊へ向かう。

釣殿に入ると、由良が香を焚き始めていた。兄が好んで使った麝香だ。

「先生、不思議な箱を見つけました」

頼政が掻き回したせいで、物の配置がずれてしまったため、由良は慎重に少しずつ清めながら部屋を整理してきたのだが、今日、鬼門きもんに位置する隅の板敷から特に強い邪気を感じ、板を外してみたところ、桐箱きりばこが収まっていたという。

箱はずつしりと重い。指先に痺れを感じた。

広賢がそつと蓋を開けると、中には人頭ほどの丸い孔雀石くじやくいしが収まっていた。すぐに蓋を閉じた。開けるべきでなかった、と感じた。

「先生。きっと、この石が釣殿の邪気の原因です」

意を決して、再び蓋を開く。

「きれい……」

真夏の森のように鮮やかな深緑は、見ているだけで吸い込まれそうだ。箱の中の少ない光でも、切ないまでに怪しく輝いていた。

「孔雀石は、兄上が最も愛した石だ」

霊石が持つ破邪の力は、種類により大きく異なる。例えば紫水晶は場の邪気を祓い、薄め、清めるのに対し、孔雀石と黒水晶は邪気を中心に取り込むことで、場から取り除く。

「世にある苦しみ悲しみを一身に集めて、身代わりになろうとする貴い石。だから、こんなに美しいのかも知れませんね」

いや、孔雀石は美醜の両極にある。同種の霊石でも、一つとして同じ模様はないが、無数の目玉が集まったように見える孔雀石はおぞましく、戦慄さえ覚えるときがあった。あれは邪気を溜め込んだ結果なのかも知れない。

「先生、浄化してみましよう」

浄化には水晶のほか、陽光、月影、香、清水、土、音曲、祝詞、塩など幾つも方法があり、効能は違う。この釣殿はすべて試してもだめだったが、この孔雀石があったせいなのか。

「安息香を試してみるか。火を持ってきてくれ」

最も強力に邪気を吸収する石ゆえか、孔雀石は傷みやすい。陽光も清水も塩も使えない石だから、浄化は厄介だ。

「かしこまりました」

由良が去ると、広賢は部屋の中を見渡した。

霊石はもちろん、獣骨、毛皮から作りかけの祭具まで、様々なものが残されていた。広賢は二十年余りかけて調べたが、集めた意図も用途も、半ば近く不明だ。

「お皿を四枚持って参りました。大きな石ですから」

安息香はエゴノキの樹脂で、薫香にも薬用にも用いられる。

紙燭から橙色の小さな塊へ火を移すと、炎が立った。

火が落ち着いたのを見計らい、息を吹きかけて消す。

白い煙が立ち、まろやかな甘い香りが釣殿に広がり始めた。

取り出した孔雀石を、中央の円座に置き、四方に香皿を置いた。

煙で燻し、浄化してゆく。

「兄上は未来を読んだ。当たらぬも八卦の卜占とは違う」

広賢と相愛の娘との婚儀を寿ぎながらも、晴仁は避けがたい運命を語った。死に別れを覚悟して迎えた妻は、五人の子を生なしてくれたが、予言通り三十路を迎える前に病没した。それでも死期を薄々知っていたから、若いふたりは最後の時までを幸せに過ごしえたといえる。だが、晴仁は自分の未来だけは見えなかった。ゆえに不幸な事件に巻き込まれた。

「兄上にもう一度会って、話をしたい」

「お会いできたら、先生は何と？」

考えてみれば、どんな言葉が再会の場にふさわしいのだろう。せめて兄の身に何が起こったのかを知りたいと思ってきた。だが、知って、どうするのだ？

「無益な思案だ。どのみち、身どもはもうすぐ死ぬ」

「十五夜には、あわわノ辻へ、わたしもお連れ下さいますし」

意外な言葉に由良を見やると、真剣な表情があった。ずいぶん女らしくなった。

「だめだ」

今できるすべての手立てを尽くすつもりだが、十中八九、広賢は命を落とすだろう。

「先生なしで、わたしはどうやって生きてゆけばいいのですか？」

先日記した遺言で、長男の信業のぶなりらに由良の行く末を託しておいた。陰陽師としては人並みでも、亡き妻に似て好人物だから、面倒は見てくれる。もつとも、鵜退治は家成が大々的な見世物として仕組んでおり、宗明流そうめいの陰陽師たちも雁首を揃えるから、生き延びられればの話だが。

由良の必死な目が潤んでいる。

「その若さで死なせるわけにはいかぬ。屋敷でおとなしくしている」

広賢は首から足玉たるたまを外すと、由良に差し出した。

「お前には特別な才がある。気が向いたら、サムハラで生計たつきを立てよ」

「肌身離さず大切にいたします。先生の神宝かんだからと対を成すと思うと、うれしゅう存じます」

どう声を掛けたものか思索していると、由良が涙顔でにっこりと笑った。

7

家成邸の釣殿には、すでに頼政がおり、庭を泳ぐ鯉を大きな目で追っていた。

「おう、博士。きれいな夕焼けゆえ、明日は晴れそうじゃのう。雨乞いでもしたい気分じゃわい」

ガハハと頼政が笑う中、広賢は無言で置き畳に坐した。

「水無月十五日の吉凶は、どうなつとるんじゃ？」

「表の陰陽道によれば、忌夜行日きやぎょうにちだ」

百鬼が徘徊する日であり、本来、夜歩きなど以ての外だ。

「ならば、ちゃんと鶴には会えそうじゃな」

頼政の馬鹿笑いを遮るように、広賢はバラリと檜扇ひわしぎを開いた。

「ぞっこん惚れとる女がおつてのう」

沈黙が嫌いなのか、頼政はしきりに話しかけてくる。付き合ってみると、悪い男でもなかった。陽気で、裏表がない。出世しないわけだ。

「なぜ今、さような話を身どもにする？」

妻の死後、恋とは無縁の広賢にとって、最も苦手な話題だった。いい齡をして、恋でもあるまい。

「明日死ぬかも知れんじやろ。わが恋心も知らず遺してゆく女を想わば、切ないではないか」

広賢の脳裏に、由良のいろいろな表情が浮かんでは消えた。なぜだ。

「行き違いもあつたが、お主はわしと生死を共にする身。互いの気持ちが一番わかると思うてな」

「人は、他人の心などわかりはしない」

「むう。寂しい話じやが、そうやも知れんなあ」

しんみりと漏らす頼政は、見かけこそ武人でも、やはり歌人らしかった。

「知つとるか？ わしは、汚名返上して官職を得るために、なりふり構わず中納言様を焚き付けて、異端の陰陽師を鵠退治に担ぎ出したと言われとるそう。なにゆえわしは、いつも悪者になるんじやろ？」

鵠に負けた時に備えて、元興寺がこせあたりが流している噂か。あるいは、河内源氏の仕業か。

市井しせいの都人にとっては、家成のごとき裕福な公卿も、広賢のような世捨て人同然の貴族も、頼政のごとく爪に火を灯して暮らす貧乏武家も、別世界に棲む貴人だ。

内情を知らぬだけに、あることないこと噂しながら、その没落を期待している。失敗すれば喜び、あげつらい、やがて忘れてゆく。他方で、都人は英雄を待望し、偶像に仕立て上げもする。

鵠を倒せば、頼政は一転して賛美的となるのだろう。

「巷ちまたの噂は、誰が言い始めたかも知れぬ。おしなべて嘘ばかりだ。多くの人間は、ろくに調べも

せず、深く考えもせず他人を傷つける。人の世は身勝手に、醜いものだ」

兄の失踪時にも、名誉を傷つける無責任な流言に、若い広賢は憤った。今では晴仁も、いわれなき悪評ごと、すっかり忘れ去られた。考えてみれば、明日の戦いで命を落としたとて、この腐り切った世に、未練はないか。

「世の中には、善人もたくさんおるんじやがな」

「善人はたいてい黙っている。つまらぬ奴ほど声大きい。数が少なくても目立つわけだ」

「鶴を倒せば、わしらは人気者になれるやも知れんぞ。皆を見返してやりたいとは思わんか？」

頼政が身を乗り出してきた。

「別に思わぬ」

めでたい男だ。一時は華やいでも、すぐに妬み嫉みそねが生まれ、いずれ世間は没落を望むようになるものだ。神童と騒がれた兄がまさしくそうだった。

「中納言様はやる気満々じゃぞ。じゃが、今日はやけに遅いのう。何ぞあったんじやろか」

頼政が手すりから身を乗り出し、池越しに寢殿しんでんを見やっている。

「公卿が人を待たせるのは、珍しい話ではない」

「博士、わしただけでも、段取りを確かめておこうぞ」

頼政が脇に置いていた絵地図を開く。あわわノ辻を中心に描いた京の町だ。

「わが一族郎党で戦える者は皆、集まった」

摂津源氏の兵二百に、全国から陰陽師や野武士たちが加わる。「万の兵、百万本の矢で、化鳥を串刺しにしてやるわ」とは、家成の口癖だった。実際の兵はせいぜい二千、矢も十万本足らず

であり、むろん誇張だ。

「数は前回の倍ほどゆえ、じっくり考えて配置は決めたつもりじゃ。前日に言い出す話でもなかろうが、先だつての二番煎じで、本当に勝てるんじゃないか」

「いや、明日は同じ轍てつを踏む羽目になる。百万本の矢はことごとく外れ、真つ暗闇の中で、人間たちが片つ端から喰い殺されるだろう」

頼政が真剣な面持ちで広賢を見返した。

「わしらはあの時、先端の黒雲も、黒き虹も、あらゆる箇所を狙って無数の矢を放った。あの一斉射が全部外れたとは思えんのじゃ」

「むろん何本かは鶴に当たったろう。だが、矢はすり抜けたのだ」

「何と?! 当たったら、刺さる。これが世の理ことわりじゃろ?」

頼政は自分の左の掌を立て、右の人差し指で作った矢で、突いて見せた。

「それは、現世の理だ」

広賢は自邸の庭を眺めながらさらに思案を重ね、ひとつの仮説に辿り着いていた。

「恐らく鶴は、冥界にいる。黄泉よみとも呼ばれる場所だ」

頼政は呆気にとられた様で、首を捻った。

「じゃが、奴は人間を殺して喰らつとるではないか」

「鶴は、冥界との間を行き来できるのだ。ゆえに、鶴が現世に出て来るまでは、何も効くまい」

「むう。確かに、あの時は何の手応えも感じなんだ。奴が現世に現れてからが、真の戦いというわけか。じゃが、陰陽師たちは黒雲を祓えるのか?」

「身どもがやれるだけやる。他の陰陽師は賑やかしだがな」

今の広賢のサムハラの術がどこまで通用するか。どれだけ体がもつか。はなはだ心もとないが、明日は持てる力を尽くすしかなかった。

「おお、中納言様じゃ」

すいわたじの透渡殿をとぼとぼ歩いてくる小男の姿が見えた。何かあったらしい。

釣殿に入るなり、家成はだらしなく倒れ込み、ごろりと大の字になった。

「疲れたわい。政がほとほと厭になった」

「何があつたのでござる？」

頼政が顔を覗き込むと、家成は寝転がったまま応じた。

「土壇場で、あちこちから横槍が入った。どいつもこいつも、磨の足を引っ張りおる」

家成が疲れ果てた顔で語るには、勝敗の如何にかかわらず、戦いに参加した人間は穢れる、翌日以降の宮中の仕事に差し支えが出ては困るから、官職を持つ者は手勢に加えるべからず、と頼長が言い始め、忠通の息の掛かった公卿たちも次々と同意した。結局、広賢については閑職ゆえ構わぬと何とか了承を得たものの、他はすべて否だという。頼政は無官だから構わない。

「この期に及んで、討伐の人数も四十人までに限るとされた。悪左府あくさふは畏れ多くも帝をすげ替えたいのじゃ。関白は自分が退治したいゆえ、邪魔をしおる。犬猿の仲の兄弟が、阿吽あうんの呼吸で手を結びおったわ」

本来、諸大夫しよだふにすぎぬ家成と美福門院にとっては、帝こそが力の源だ。頼長はこの機に家成を潰すと決めたのか。

「今さら後へは引けんが、これでは倒しようがあるまい。良き手はないか、博士」

「いや、数は少ないほうが、好都合でしょうな」

「兵を集め申したが、実はわしもそう思っただござった」

「何じゃと？」

むくりと半身を起こした家成に、頼政が続ける。

「鶴が地に下り立つのを待ち、襲ってくる鶴を太刀で倒すべし。博士、お主はわがそばで黒雲を祓ってほしい。姿さえ見えれば、わしが必ず討ってみせる」

前回は味方の救助を優先したために、力を出し切れなかったという。

広賢の仮説を引きながら頼政が戦い方を説くと、家成も関心を持った。

「なるほど。あえて襲わせてから、倒すわけか」

いかにも頼政らしい乱暴な戦い方だが、広賢も他に手を思いつかなかった。

「博士、首を刎ねれば、鶴を討てるんじゃないやろな？」

「恐らくは。鶴は獣の体を合わせ持つ生き物だ。首を刎ねるか、心ノ臓えぐを抉れば、息絶えるであろう。四十名の精鋭でいかに討つか、身どもに思案がある」

頼政が身を乗り出し、家成が檜扇をパサリと開いた時、元興寺がごぜが現れた。

「中納言様。安倍本家の陰陽師が面会を願ひ出ております。通しまするか？」

広賢と頼政を交互に見てから、家成が家人に頷くと、やがてぼつてりとした色白の男が現れた。

中原が釣殿の入口で両手を突いた時、庭池の鯉が勢いよく跳ねた。

長い夏の日が沈み、平安京の夜空に望月が高く昇っている。

鼻を突く嫌な臭いに閉口し、頼政は大口を開いて息をした。

退治のために必要な物なら何でも揃えてやると言う家成に、広賢は注文を二つ出した。

牛馬の臓腑を二十頭分と、あるだけの罪人の骸である。鶴が餌に喰らい付いている最中なら、

討ち取りやすかろうとの目算だ。だが、四方に置かれた畏は、暑さのために腐臭を放ち、邪気を

祓うために広賢が焚く香にも、悪臭を和らげる力はなかった。

あわわノ辻の中心にいるのは、頼政と広賢、隼太と中原の四人だけだ。

武士と陰陽師の二組に分かれ、前後あるいは左右から鶴を挟み撃ちする。

——仇討ちをいたしとう存じます。

昨夕、家成邸を訪れた中原は、いかなる流派にも属さぬ在野の陰陽師として戦いに加わりたいと懇願した。すでに陰陽寮に官職返上の届け出をし、安倍本家からも離れたという。

家成は泰親の回し者ではないかと警戒したが、鶴と戦った経験のある真面目な陰陽師であり、広賢も人物に太鼓判を押したため、戦列に加わるようになった。

「博士。この、何とかの比礼ひれは効くんか？」

辻の中心には、見慣れぬ祭具が置かれていた。

身の丈ほどの衣架いかに掛けられた金縁の大きな布には、×印が大きく印され、霊符に描かれるよ

うな紋様が金糸で刺繍されている。あらゆる邪気を祓う十種神宝じゅくさのかんだからのひとつらしい。

「品々物之比礼だ。効果のほどはわからん」

辻の東西南北に五人ずつ立つ武者たちは、弓上手を選びすぐった。説得の末、先の戦いに参加した赤鬼と隻眼たちも加わってくれた。暗闇の近接戦闘を四人に絞って同士討ちを避けつつ、弓の手練れを離れて配置し、頼政の指図で遠方から支援させる。政敵による妨害を防ぐため、穢れの拡大を防止する名目で、辻への立入りを厳に禁じてもいた。

家成は雅楽寮うたりのやうの二階で戦いの成り行きを見守る。他の公卿たちもどこぞの建物の中から見物しているはずだった。

「それにしても暑いこのう。ただでさえ蒸し暑い夜に、これだけの炎に囲まれとるんじゃからな」

前回と違って人数が少ない分、篝火の数を増やした。黒雲の中で少しでも明かりを得るためだ。「その不快を歌にしたらどうだ？」

檜扇でゆったりと扇ぎながら、広賢は涼しい顔である。

「こんなに暑苦しゅうて、気の利いた歌が詠めるものか。お主は鎧を着けとらんから、まだましなんじゃ。ひと雨、来てくれんかのう」

「殿、無駄口は慎まれませ」

「いや、頼政殿は戦いを前に、われらの気持ちをはぐそうとなさっておられるのじゃ」

「さすが中原。ようわかっとなるわい。鶴よ。どうせ来るなら、早う出て参れ！」

頼政がガハハと笑った時、丹田をヒヤリと寒気が襲った。

南から元興寺が現れ、しゃがれ声がした。

「東三条ノ森から、黒雲が立ち上った由」

前はこれほど早く悪寒を感じなかったはずだ。

「黒き虹が架かり始めた」

夜目の利く広賢が東南の空に目を凝らしているが、頼政にはまだ見えない。

やがて、平安京の大空に架かる、漆黒の闇の橋が近づいてきた。

「前回より、ちと大きゅうありませんかな？ おまけに速いようですよ」

中原の声は緊張でこわばっている。

戦闘開始は、虹が完成した後、あの恐ろしい悪寒を感じてからだ。

鶴が辻の直上に現れた瞬間、頼政の合図で辻の四方から一点めがけて順に連射する。あえて僅かずつ矢をずらして放つことで、冥界から出てきた瞬間を確実に捉えるわけだ。黒い霧が下りた後は、戦いながら臨機応変に命じる。

「息苦しゅうて、いやな感じじゃわい」

頼政は五人張りの強弓をギュツと握り締める。

傍らの広賢は黙したまま、黒雲の動きを目で追っていた。

黒き虹の下では月光が失われ、辻に焚かれた数十の篝火が闇の天井を照らし出す。

遮るものは何もなく、虹は辻の上空を越え、禁裏まで到達した。

頼政は瞼を閉じて、感覚を研ぎ澄ます。

篝火のはぜる音が、あちこちから聞こえるだけだ。

「禍々しき気配が近づいて参ります。禁裏の方角からですよ！」

中原が言った直後、頼政も感じた。首筋をいきなり氷の手で触られたような感覚だ。

前は上空にきた時に気づいたが、邪気が強くなっているから、感じたらしい。だが、なぜ禁裏から来るのだ？

やはり多子が鶴だという噂は本当なのか。螢火は大丈夫だろうか。

「鶴だ。もうすぐ現れるぞ」

広賢に促されて、四人は二手に分かれた。

「弓隊、構えよ！」

四方へ声を投げてから、頼政は直上の黒雲を睨みつけた。

自らも強弓に矢を番え、引き絞ってゆく。

「オン アボキヤ ベイロシヤノウ

広賢と中原が光明真言を唱え始めた時、ゾゾゾと、頼政の背筋に寒気が走った。

「来たぞ！ 放て！」

ヒヨーヒヨー

虎鷲とらじゆみに似た鳴き声を掻き消して、ビュビュ、ビュビュと矢音が続いた。

とたんに黒い霧が地面まで下りてきた。前回よりも明らかに濃厚だ。

「弓隊は皆、黒雲の外へ出よ！」

武者たちが急いで離れる足音がした。

「マカボダラ マニ ハンドマ

二人の陰陽師が白い光をまもっていた。

泰親ほどではないが、さすがに広賢は明るい。

漆黒の闇の中、広賢と中原、中心の比礼と篝火の周りだけが見える。

少し離れてドンという鈍い音と同時に、足の下から振動が伝わってきた。辻の北だ。矢の連射は失敗したようだ。後はもう、太刀で倒すしかない。

頼政はすばやく得物を剣に代えた。

悲鳴が上がった。北の方角だが、様子はわからない。

ふんと血の臭いが漂ってくる。あの嫌な咀嚼音が聞こえてきた。

(餌を喰っておればいいんじゃが……)

また悲鳴だ。今度は辻の東からだ。

もしや、下りてきた黒雲がさらに大きくなり、逃げ切れなかったのか。

へ ハラバリタヤ ウン

「東におる。迎え撃つぞ」

四人はその場で体を東へ向けた。闇の中をむやみに動くのは危険だ。

あくまで鶴をおびき寄せ、辻の中央で倒すと申し合わせてある。

「来ましたぞ！」

おぼろに見える鶴の影は、優に牛五頭分の大きさがありそうだった。

「先回よりずいぶん大きゅうなつとるわ。隼太、中原、後ろへ回り込め」

闇からヌツと現れたのは、猿の顔だ。口が血肉で汚れている。

牙を剥くと、唾液が糸を引いた。鶴の吐く黒い息が、黒雲の闇に消えてゆく。

肩から前肢は逞しい猛虎のそれだった。

広賢の放つ光とゆらめく篝火の炎で、ほっそりとした胴の灰色の毛並みが見えた。

(こやつが、鶴か……)

頼政と広賢は正面から対峙した。

猿の巨眼を睨みつけながら、頼政は闘志を充実させてゆく。

鶴が黄と黒の巨大な前肢を進めた瞬間――

頼政は飛び込んだ。

振り上げた太刀を、鶴の猿顔めがけ、力の限り叩き込む。

突然、左から殺気を感じた。

とっさに太刀を変化させ、ガキッと受け止める。

並行した刀傷を作る四本刀の正体は、驚くほど長い虎の鉤爪かぎづめだったわけか。

ものすごい力だ。力比べでは勝ち目がない。

頼政はいったん引いた。

鶴が動く。今度は右だ。広賢を狙っている。

とっさに広賢の前へ飛び出し、太刀で虎爪を受け止め、流した。

また、左から虎の手だ。すかさず跳び退って、からくも逃れた。

これでは、八本の刀で左右から攻められているに等しい。防戦一方だ。

「後ろはどうなつとる、隼太、中原？」

「大蛇と戦うており申す！」

隼太から必死の声が返ってきた。

頼政は、広賢の前から、鶴の右側へじりじりと回り込む。

へ ハンドマ ジンバラ

広賢は左手で印を結び、鶴の間近で微動だにせず、術を施している。

(この男、見直したわい)

やにわに頼政は駆けた。右へ抜ける。

細めの胴めがけて、太刀を振り下ろそうとした瞬間――

ヒョーヒョー

鶴が後脚で立ち上がった。

上方から八本刀が迫る。頼政はすかさず後ろへ逃れようとした。

が、着地の寸前、腹に激痛が走った。

変化して突き出された虎の爪を、正面からまともに喰らった。

鋭い爪が一本、鎧を突き破り、腹を貫いている。

猛烈な衝撃で、頼政の体が吹き飛んだ。

仰向けに叩きつけられた先に、厳しい顔つきの広賢がいた。

「先ほどは助かった。立てるか？」

頼政はペッと血の塊を吐いてから、差し出された手を取り、立ち上がった。

「奴は、前よりも強うなっとるぞ」

「やはり、表の陰陽道では勝てぬようだ」

広賢は左手に丁字の奇妙な祭具を手にしていた。

「されば一か八か、サムハラの術を試す。だが、長くは使えぬ」

「タカマノハラニ カムヅマリマス

文言も調子も全く異なる呪じゆだ。耳にするだけで、背筋が寒くなる。

広賢の体が青白い光をまとい始めた。ゆっくりと鶴に向かって足を踏み出す。

手中の三ツ石は鮮やかな緑光を放っていた。

「スメカミタチノ イアラハシタマフ

場が歴然と変わった。広賢の周囲は涼風が吹くように、闇が消えている。

中央の比礼が青白く、燦然と輝き始めた。

黒雲がみるみる薄くなり、嘘のように見通しが広がった。

「生きとる者は、矢を構えい！」

頼政は大音声で命じ、腹の痛みを堪えながら太刀を構え直した。

「イマシ コノミヅノタカラヲ モチテ

鶴は怯んでいた。眩しそうに俯き、虎の前肢をすくませている。

広賢がサムハラの術で抑え込んでいるのだ。

頼政は脱兎のごとく駆ける。

あと七歩の所で地を蹴った。太刀を突き出しながら跳ぶ。

虎の手がゆらりと動いた。大きな掌へ突き入れる。

確かな手ごたえがあった。血飛沫が飛ぶ。冷たい。鶴の血は青いのか。

「勝てるぞ！ わしにかまうな！ 矢を放て！」

ビュビュビュと放たれた矢が、鶴の体に次々と突き刺さる。

巨体のあちこちから、青い液体が流れ出した。

頼政は根元まで刺さった太刀を、虎の手から引っこ抜く。

青い血潮を全身に浴びた。冷水をぶっ掛けられているみたいだ。

腹の強い痛みでよろめき、うずくまった。

頭上で殺気を感じた。四本刀が振り下ろされている。逃げねば――

間に合わない。いや――

マカルトモ サラニキナント オシヘタマフ

広賢の術が、鶴の虎爪を抑え込んでいる。

頼政が逃れた直後、虎爪が地面に四本突き刺さった。

すかさず、馬の鞍ほどもある虎手の甲を、深山木で力の限り、上から突き刺した。

そのまま手前へ引き、切り裂いた。これで片手を封じたはずだ。

「助かったぞ、博士！」

見やると、広賢の顔が紫色に見えた。声も苦しげだ。

すでに百本以上の矢が鶴の巨体に刺さっている。動きが鈍い。

「皆の者、今のうちじゃ！ 鶴を討ち取れい！」

頼政は叫びながら血を吐いた。青く染まった太刀で体を支える。

十人ばかりの武者たちが鶴に向かって駆けた。隻眼も赤鬼もいる。

切りつけるたび、次々と血飛沫が上がった。

(見るからに鶴は弱つとる。このまま行けば、勝てるぞ)

にわかには、辻の東西が騒然となった。

どこに隠れていたのか、左右からぞろぞろと武者が現れた。百人はいるか。

先頭の鎧武者は、源為義のようだ。戦いの様子を窺いつつ、手柄を奪えるなら横取りせよとでも頼長に命ぜられていたわけか。手柄が欲しいなら、くれてやる。

「皆で力を合わせて、鶴の首を挙げよ！」

人間を喰らうこの兇暴な異形さえ倒せば、それでいい。

だが意に反して、河内源氏の武者たちは数段に分かれて整列し、弓を構えた。

「何のつもりじゃ？ 味方がおるんじゃぞ！」

頼政の叫びは、矢音で掻き消された。

味方の野武士たちは全員、体を射抜かれて、倒れた。手柄を独り占めにする気だ。

為義の非情に、頼政の腸が煮えくり返った。

「鶴こそは日ノ本最強の異形ぞ。討って、河内源氏の名を挙げよ！」

武者たちが得物を手に、鬨とぎの声を上げた。

牛馬の臓腑や死人の骸を乗り越え、鶴の左右から辻の中央へ殺到する。

頼政は齒軋くはりした。

頼長が穢れを理由に家成の戦力を削ったのは、退治の膳立てだけさせて、子飼いの河内源氏に漁夫の利を得させるためだったのだ。

源氏武者たちが蟻のように鶴の巨体に群がった時――

キエー！

闇を劈く叫びが聞こえた。

絹を引き裂くような猿叫を発しているのは、鶴なのか。

さしもの頼政も怯んだ。鼓膜が破れそう。

何という耐えがたい金切り音か。

武者たちは得物を取り落とし、耳を塞いでいる。

猿叫が止むと、静寂が戻った。呪が途絶えている。

振り返ると、広賢が片膝と右手を突き、苦しそうに息をしていた。もう限界か。

辺りが次第に闇へと戻ってゆく。

「撤退じゃ！」

為義が叫ぶ。

キエー！

再び始まった鶴の猿叫に、戦場の武者たちが身をすくませる。

頼政はかがみ込んだ。

体に付いた自分と鶴の血で砂を濡らして丸め、急いで両の耳に栓をした。

「皆、濡れ砂で耳に栓をするんじゃ！」

鶴はまるで蘇ったかのように、四本肢で力強く立ち上がった。

確かに裂いたはずの虎の手が元に戻っている。無数にあった体の傷口も閉じかけていた。

(こやつは自分の体を治せるんか。何と恐ろしい異形なんじゃ……)

頼政は強弓を拾い上げ、矢を番えた。

鶴は恐怖ですくむ武者たちを四本刀で切り裂き、あるいは巨大な虎手で叩き潰した。バタバタと河内源氏の武者たちが倒れてゆく。

だが、今なら狙える。

頼政の放った矢は、過たず鶴の首筋に命中した。

鶴が獰猛な呻き声を上げた。

すかさず二の矢を番え、引き絞る。

ゝ イマシ ニギハヤヒガ コラアツメテ

再びかすれ声の呪が聞こえ始めた。鶴が怯む。

すかさず放った二の矢は、猿の喉に深く突き刺さった。

鶴はずんと地に伏せ、沈黙した。

(首を刎ねねば)

頼政は得物を再び深山木に持ち替えた。

視界の端で、広賢の体がふらつき、ばたりと倒れた。

辻がまたもや黒雲に包まれてゆく。呪を唱えているのは、中原だけだ。

頼政は痛む腹を左手で押さえながら、鶴に向かって暗がりを進む。

巨体を挟んで、鈍い呻き声をした。

「隼太殿、立たれい。今じゃ！ 大蛇だけでも、討ち取られい！」

大蛇に腹を咬まれた中原が宙に浮いていた。

顔はすでに紫色だ。助かるまい。

(鶴が傷を治しとる。急がねば……)

辺りは、闇に篝火だけの暗がりへ戻っていた。

頼政は鶴の右側へ回り込む。今のうちに首を打ち落とすのだ。

鶴が体の向きを変える気配がした。

頼政は途中、気を失いそうになって、片膝を突いた。血がずいぶん流れたらしい。

(頼む。あと少しだけ、もってほしい)

鶴を討てる最後の機会があるなら、鶴が中原の臓腑を喰っている間だけだ。

尾の蛇でなく、鶴は猿の顔で臓腑を喰らう。

ならば、脇腹から鶴の体を登り、真上から首の根元を太刀で刺し貫き、切り落とす。

中原と自分の死を無駄にせぬために、命尽きるまで鶴に食らいついてやる。

辻は黒雲の中に沈み、小さな篝火がポツと浮かんでいるだけだ。

手探りで進むうち、鶴が臓腑を喰らう嫌な音が聞こえ始めた。

背後から苦しげな声がした。

「頼政。あと一度だけ、奴の動きを止めてやる」

広賢は倒れたままだが、意識を取り戻したらしい。

「おう、博士。頼むぞ！」

〜 ニノオト フルベユラユラ カク イノリテセバ

広賢がうつぶせのまま手印を結び、震え声で呪を唱え始めた。

手中の三ツ石が弱い光を放つと、鶴がビクリとした。

だが、優男の顔は紫に変色し、苦悶の表情だ。

たちまち闇に孔雀石の緑光が広がってゆく。

頼政は血反吐を吐きながら、駆けた。

身をすくめる鶴の体毛を掴みながら、体の上によじ登る。

鶴の背に馬乗りになった。頭のほうへ、這って進む。

途中で、広賢の声が途絶えた。

(博士、ようやってくれた。もう十分じゃ)

頼政は異形の太い首筋にまたがった。両手で刀を振り上げた時――

シュルシュルと音がした。右前腕を激痛が襲う。

人間の頭ほどの大蛇が喰らいついていた。間近で目が合う。

鶴のもうひとつの武器を忘れていた。

これまでは隼太と中原が戦っていたから、攻撃されずに済んだだけだ。

蛇の毒牙が腕を貫通している。

(こん畜生めが！)

ガブリと、頼政は大蛇の左眼に噛みついてやった。

冷たい血の味がする。渋柿を食べた時のように、舌が痺れた。

口を離すと、大蛇が弱ったように見えた。

頼政も体に毒が回って死ぬだろうが、それまで、まだ少し時はある。

腕を噛ませている間は、これ以上攻撃できまい。

頼政は左腕一本で太刀を構え直した。

今のうちに、鶴の首を刎ねる。

息を吹き返したように、鶴の体が動き出した。傷を治したのか。

「いかん！ 博士、あと少しじゃ！」

返事はない。

振り落とされぬよう、鶴の体に必死でしがみつく。

いつまで命がもつか。体が痺れてきた。毒が回り始めている。

「タカマノハラニ カムヅマリマス

甲高い女の声だ。

おかつぱ頭の少女が、突つ伏した広賢のすぐ脇にしゃがみ込んでいた。

手中の漆黒の三ツ石が、鮮やかな銀光を放ち始めた。

「スメカミタチノ イアラハシタマフ

鶴が怯み、体をすくませた。右腕に食い込む牙が緩んだ。

(今じゃ！ 討てるぞ！)

頼政は最後の力を振り絞った。両手で太刀を振り上げる。

雄叫びを上げ、鶴の首筋へ振り下ろす。

青い血飛沫を浴びた。

鶴がガクンとへたりこみ、ぐったりとした。

太刀を半分近く突き入れた。だがもう、腕に力が入らない。

腕が痺れて、感覚がなくなってきた。蛇毒のせいだ。

少女の声が途絶えた。体が術に耐えられなくなったのか。

(あとほんの少し、じやのに……)

頼政は身を起こすと、胸に太刀の柄頭つかがしらを当て、体重を掛けようとした。

だが、ぬるりと、血で滑った。

(ならば、これでどうじゃ……)

頼政は鶴の爪が作った腹の穴に、手探りで柄頭を差し込んだ。

あまりの激痛に、気を失いかけた。だがこれなら、体の重みだけで、首を落とせよう。

篝火が揺らぐ暗がりの中、黒い影が現れた。長身だ。

「誰じゃ？」

黒天狗は答えず、鶴の頭の上に立った。

「誰か知らんが、お前に手柄をくれてやる。このまま鶴の首を刎ねよ。今なら、討てる」

突然、頼政の脇腹をドンと足蹴が襲った。

たまらず、頼政は鶴の体から、転がり落ちた。

深山木が鶴の首から抜かれ、放り投げられた。

(何、と……)

体中が痺れ、身動き一つとれぬ。血が、流れすぎた。

頼政はもう、痛み苦しみを感じなかった――。

闇の中で、広賢はかすかに意識を取り戻した。

(鶴を、倒せたのか……)

術を施している途中で、広賢は気を失った。

体が鉛と化したように重い、まだ死んではないようだ。

手中の道返玉を見た。孔雀石の緑光がまだかすかに残っている。

鶴なる異形は進化していた。怨の力で傷口を閉じ、驚くべき速さで治癒させる。

今宵討たねば、もう誰にも倒せなくなる。

闇の陰陽道では、孔雀石を通して怨を自らの体に取り込み、サムハラで鶴を抑え込む。黒

雲の怨を全身に巡らせれば、心身を蝕まれるのは当たり前だ。皮膚の変色から考えると、鶴の蛇

毒の正体も怨に違いない。とすれば、広賢はこのまま死ぬわけか。

「頼政、勝ったのか？」

返事はなかった。あの様子では相打ちか。いや、あの男なら、討ち取ったのではないか。

炎が揺れるように意識が行きつ戻りつするなか、闇の中を大きな何かが起き上がる気配がした。

ヒョーヒョー

広賢は絶望し、ひとり苦笑した。

(このまま、負けて死ぬのか……)

広賢も晴仁も、禁断の術サムハラを使う闇の陰陽師として、歴史の狭間へ消えてゆくわけだ。

巨獣の気配が近づいてくる。

戦っているうちにも、体がさらに大きくなっていた。

鶴は牛馬の臓腑や死人の骸に見向きもしなかった。生きている人間の臓腑しか喰わぬらしい。罪深い異形だ。

(いや、まだ手はある)

自分を喰わせながら、間近で術を施せば、鶴には大きな打撃となろう。隼太でも河内源氏でもいい、生き残りの武者がその間に鶴を討てまいか。

(兄上、最後に力を貸して下され)

鶴の位置を確かめようと顔を上げた時、ふと目の端に小さな銀色の残光が入った。足玉だと知り、愕然とした。

少し離れて、由良が仰向けに倒れている。胸が上下しており、まだ息はある。

おおよそ察しがついた。広賢を救うために、サムハラの術を使ったのだ。

鶴がゆつくりと近づいてきた。由良を喰うつもりか。

「今宵は幾人喰った？ もう、十分だろう」

道返玉を手に、広賢は這った。このままでは、間に合わない。

へ タカマノハラニ カムヅマリマス

左手で印を結びながら、咒を唱えた。三つの孔雀石が光を放つ。

鶴が動きを止めた。その間に夢中で這い、由良に覆いかぶさった。

へ スメカミタチノ イアラハシ……

広賢は勢いよく吐血した。血が真っ青だ。

意識が途切れ始めた。いよいよ、だめらしい。

倒すのは無理でも、せめて自分を喰わせて、由良を救えまいか。

再び、鶴が蠢き始めた。

道返玉の残光で、半身ほどもある大きな猿顔と目が合った。悲しげな瞳にも見えた。わずかに数歩離れた間近に、鶴がいる。

「喰うのは、あと一人にしてくれ」

体中が痺れて、重い。道返玉の光も消えてゆく。

ヒョーヒョー

鶴が天に向かって鳴いた。広賢には、敗北した死者たちへの弔歌のように聞こえた。

たちまち黒雲が集まり、鶴の体を包み込んでゆく。

広賢は眠るように意識を失った――。

10

凄惨な戦場を朝日が照らし出すと、赤と青が確かな色を取り始めた。

「頼政はまだ息があるぞ！ 元興寺、早う手当てさせい！」

血だまりの戦場へ駆け出た家成は、興奮して老僕に命じた。

頼政は生きているのが不思議なほどの深傷で、顔は紫に変色して虫の息だ。ふかで助かるかどうか、

わからない。

老僕が畏まって、家人たちに指図を始めた。

あわわノ辻には、数十の骸が転がっている。臓腑のない骸は十数体か。

雅楽寮から、暗闇の中の戦いがすべて見えたわけではない。それでも幾度か黒雲が晴れ、明るい光が見えた。広賢がサムハラの術を駆使し、頼政が死闘の限りを尽くしたことはわかった。

「他にも生きとる者がおつたら、すぐに手当てをさせるんじゃ！」

清目たちが、河内源氏の死者たちを選び、戸板に乗せて運んでいた。弔いもあろうが、為義は参戦の事実自体を速やかに消し去る気だろう。

「広賢！ どこじゃ？」

篝火を頼りに探すと、折り重なって倒れている陰陽師の姿があった。

そのすぐ脇に、誰かがしゃがみ込んでいる。

「まだ、生きておりまする」

ゆらりと立ち上がった橙色の派手な出で立ちの男は、安倍泰親だ。

「指御子か。そちの親分は、汚い手を使いおるのう」

家成は吐き捨てた。

頼長があればほど大掛かりに手柄の横取りを試みるとは、考えていなかった。

「京の治安を預かる左府様にとっても、この結末は不本意でございましたらう」

政争で鎬しのを削っているのは、家成と頼長だけではない。最後の最後で邪魔をしたのは忠通か。

「結局、最大の敵は異形より、人間というわけか」

「中納言様。広賢と女陰陽師を預かりまするぞ。命を救えるやも知れませぬ」

泰親が家人たちに手で合図を送っている。

「そちを信じてもよい理由は？」

「広賢の顔をご覧なされ」

陰陽師の端正な顔は、真紫だ。

「これほどまで邪気に蝕まれた人間を救えるのは医道でなく、陰陽道のみでござる」

「広賢が名を成して、そちは得をするのか？」

家成の問いに、泰親は睨むように見返してきた。

「鵜はますます大きく強く、兇暴になっております。私は戦いとうありません。もしも鵜を

倒せる陰陽師がいるとすれば、安倍広賢のみ。御免」

くるりと橙色が背を向け、堂々と去ってゆく。

あわわノ辻に朝の風が吹いた。

今日は昼下がりで、大路からこの生臭さが消えはすまい。

くくくく